

<前回・ブルトマン1・新約聖書学>

1.. 弁証法神学運動におけるブルトマン

- ・方法論としての聖書学と自由主義神学の同質性
- ・弁証法神学への共鳴、キルケゴール的な信仰理解

2. 新約聖書学の方法とその帰結

聖書テキストの読解についての方法論は洗煉されたが、キリスト論的事柄はいわばカッコに入れられることになる。

- ・様式批判

「個々の伝承の歴史を叙述することを課題とする作業」「それらの伝承片の成立と歴史を再構成することによって、成文化以前の伝承の歴史を解明する」

「ある共同体の生活の凝縮したものとしての文学が、その共同体のきわめて特定の生活の表現および必要の中から生まれたということ」

「一定の文体(Stil)、様式(Form)、および文学類型(Gattung)を生み出した」

「すべての文学類型は固有の<生活の座>(Sitz im Leben)(Gunkel)を持つ」

「生活の座」「個々の歴史的イベントではなく、共同体の生活における典型的な情況ないし行動様式」

「<類型>ないし<様式>」「も美学的概念ではなく社会学的概念なのである」(11)

「様式史研究が他のあらゆる史学的研究と基本的に異ならず、循環論証の一種であることを認識することは、本質的に重要である」(12)

様式と共同体の生活

↓

- ・方法論的な制約：個人の内面には遡及しない。イエスの宗教意識は？

3. イエスと初期キリスト教

「イエスの告知は新約聖書神学の諸前提に属するのであって、新約聖書学自体の一部ではない。なぜなら、新約聖書の神学は、キリスト教がその対象、根拠、帰結をたしかめていくその思想の展開の中に存するのである。そして、キリスト教信仰というものは、キリスト教のケリュグマ(宣教)、つまりイエス・キリスト、しかも十字架につけられし者、甦えりし者を神の終末論的な救いの業として告知するケリュグマが存在してのちに、初めて存するのである。」(3)

イエス個人

初期キリスト教

イエスの宗教運動(神の国についての告知) → キリスト教共同体・宣教 → 神学

4. イエスをどう描くか

「イエスという歴史的現象を心理学的に説明しようとは全然考えていない。だから伝記本来の事柄は、短い導入的な一節を除いて、全然立ち入らない。」

「イエスの「人となり」についての興味も排除される」、「イエスが自分をメシアと考えたか否か、・・・私は以下の叙述においてこの問題をまったく顧慮しなかった。それは結局のところ、この問題については確かなことは何も言えないからではなく、むしろこの問題は副次的な事柄だと思うからである。」(7)

「その対象は以上からしてイエスの生涯や人となりではなく、その「教説」、その宣教なのである。私たちはイエスの生涯や人となりについては少ししか知らない代りに、彼の宣教については多くを知っていて、一貫した像を構成することができる」、「史料が私たちに与えるものは、実際さしあたり教団の宣教なのである。」(9)

5. ブルトマン 2 —— 信仰論と神話論

(1) ブルトマンと非神話化

1. 聖書学者ブルトマン → バルトの弁証法神学への関与以降も、自由主義神学との関わりを保持。
↓
聖書学でないとすれば、信仰はどこで可能になるのか？
2. 近代的世界観と聖書的世界観（黙示文学、グノーシス主義＝神話論）との対立
近代人は聖書的な宗教を信じうるか？
→ 信仰の事柄（宣教、内容）と世界観（形式）との関連はいかなるものか、両者は分離可能か。
3. 聖書の非神話論化(Entmythologisierung)と実存論的解釈
4. キルケゴールの真理論：客観的真理と主体的真理
信仰と世界観との区別・分離 → 信仰の主体性の純化
これは個人的な事柄か。
5. 聖書を非神話論化することによって、実存論的解釈によって、主体的真理を取り出す。
世界観という形式ではない仕方での信仰の表現。
ハイデッガー哲学（『存在と時間』）の枠組み（本来性・非本来性）
6. 創造物語：古代人の天文学や生物学の理論ではなく、神の語りかけに聴従し応答する人間。
人間存在の善性のメッセージ、信仰とは神の語りかけに対する「今ここ」の決断。
7. 説教というモデル（プロテスタント・ルター派的？）
→ ブルトマン学派における「言葉の出来事」
神の語りかけと決断
8. ブルトマンの問題点
 - ・信仰と世界観とは分離可能か、分離すべきか。形式と内容の分離？
決断の抽象化
 - ・神話あるいは構想力の理解が一面的ではないか。
神話は過去の遺物か、構想力の解放性についてブルトマンは理解しているのか。
 - ・近代的世界観あるいは個人主義的信仰を自明の仕方前提にしていないか。
科学技術や個人主義への批判はブルトマンから可能か？

(2) ブルトマンの信仰論

- ①言葉の出来事性：語りかけ→言葉における継続・出会い→応答・決断
- ②時間性—終末論的（そのつどの今）→決断・聴従
- ③理解：神理解—自己理解（神学—人間学）の循環
- ④実存的な自己理解（自己の存在可能性）と歴史的知識・世界観との相違
- ⑤客観性→主観性・主体性
→自由の処理できない・神の主権

(3) 引用資料

A. Glauben und Verstehen 1 (著作集 11)

0. 「自由主義神学と最近の神学運動」（1924）
1. 「神を語ることは何を意味するか」（1925）：③④⑤

「～に関して語ること」は、常に、語られるものの外にある立場を前提とする。

語り手の具体的・実存的状況とのかかわりなしに真であるような一般的命題・一般的真理として神を語ることはありえない。(34)

体験や内面生活は、われわれはそれを客体化するやいなや、実存的性格を失っています。

そうした関連が失われると、この命題は、神が人間と全く別なあるもの、形而上学的実体、霊界、……要するに非合理的なものであることを意味しうるにすぎない。(37-38)

この世界の統一的連関の中で理解しうるものを現実的と見なす。(39)

この世界像は、われわれ自身の実存から目をそらしたところで立案されている。そこでは、われわれ自身は、諸々の客体の中の一つの客体と見なされ、われわれの本来の実存への問いから目をそらして獲得されたこの世界像の連関の中へくみこまれる。人間を加えて完成させた世界像を人は通常、世界観(Weltanschauung)と呼ぶ。(39)

2. 新約聖書のキリスト論

パウロの研究が認識した神話論的表象は、それとどのように関係するのか。救いの生起とキリスト教の実存の神学的説明はすべて、同時代の概念性の中でなし遂げられる。その説明は、常に人間とその世界について語ることでもあるから、伝統的な人間学的・宇宙論的概念の中を動く。そのような概念は時の流れに沿って変化するので、パウロも神学やキリスト論も、批判ぬきでは理解されない。(296)

3. 新約聖書における神の言葉の概念：①④

説教は聴くものの良心に向けられる。

人間についての理論的教えではなく、語りかけの生起が、実存的自己理解の状況を、実際にとらえるべき自己理解の可能性を人間に開くのである。語りかけは、あれこれを任意に選択させるのではなく、決断を迫る。(316)

説教は信仰を要求する。(317)

解釈は、有意義に遂行されるとすれば、当時の状況に応じてはめこまれていた神話論的概念性から実際に解き放たれ、それによって本体の意図が認められるようにならなければならない。

形而上学的意味での神子性、処女降誕、先在、最後のらっぱの響きと共に雲に乗ってくる再臨などの諸表象は、確かに神話論である。しかし、神がキリストの十字架を通してこの世にゆるしを与えたという思想も、神話論として除去されて良いのであろうか。……除去されるべき神話論はどこまであろうか。それはキリスト教信仰にとってどこまで本質的なのであろうか。

神話論を除去するための批判的基準が与えられないだろうか。(357-358)

B.Glauben und Verstehen 2 (著作集 12)

4. 「新約聖書およびギリシア精神における世界と人間の理解」(1940): ②④

信仰は世界観ではないということである。というのは、世界観というものはそれぞれ自分の運命を世界と人間との普遍的な理解を根底として、その普遍的な事象の一事例として理解しうるものにしてしようとするものである。新約聖書の考え方によれば、わたしはそうした普遍的状况において、わたしの真の実存を獲得するのではなく、いま、ここでという具体的状況において、すなわち自己を得るか、失うか、見定めがたい状況のなかで、自分の実存を獲得するのである。これは、わたしは、単独者として神の前に立つということなのである。(101)

信仰は、あらゆる未来の先取りとして、人間の非世界化を意味し、終末論的実存への転換を意味する。(110)

なんらかの総合、またこの二つにまたがる秩序の不可能性ということこそ、まさに、キリスト教的実存が終末論的実存であることのしるしなのである。

キリスト教の側からの世俗的科学への抗議というものは存在しない。なんとすれば、世界の終末論的理解は、世界説明の方法ではなく、非世界化は、世界解明においてでなく、ただ瞬間においてのみ完遂されうるものだからである。(113)

C. Glauben und Verstehen 3 (著作集 13)

5. 「キリスト教的希望と非神話化の問題」(1954): ②④

両方の希望像が一ヘレニズム的グノーシスの規模有象と同様に、ユダヤの希望像が一神話的な希望像であることは疑いのないことである。

これら二つの世界像は、神話的な古代の世界像と結びついている。

現代の人間にとっては、この神話的な表象の仕方は縁遠いものとなった。(111)

そういう人間の実存の本質についての見解が、それどころか知が神話的諸表象の基礎になっているかという、いわゆる非神話化の問題である。(113)

世俗化による非神話化：マルクスやヘーゲルにおける歴史的発展とその目的の像は、非神話化され、世俗化された原始キリスト教的終末論である。(114)

人間の内面において、決して到達されない将来が確かに事実上そのつど現在となったのである。この場合、古い神話的希望像は世俗化されたのではなく、霊化されたのである。

(114)

6. 「科学と実存」(1955): ④③

われわれを取り巻く世界やわれわれの会う世界のもろもろの現象や、自然、歴史、人間、そして人間精神の方法論的研究を、われわれは科学と呼ぶ。

独特に人間的な生き方を実存と呼ぶ。

科学は、諸現象を認識しようとすることによって、諸現象を思惟の対象とし、諸現象を「対象化する」。(139)

科学においては、対象化する思惟は首尾一貫しており、方法論的に形成されている。

(140)

客観化する叙述が生じ得ないような実存的理解が存在する。(149)

人格的存在は実存的出会いに対してのみ開く。(150)

実存はそのつど、瞬間の諸々の決断における出来事であることを意味する。

客観化する思惟は、この思惟の対象が属している対象領域の連関からその対象を理解する。(153)

このことは、神学に対しては神についての主張は客観的主張としては可能ではないという洞察に結果することになる。

神については実存からのみ、おそれとおののきのうちに、感謝と信頼の内に語られ得るのみである。(155)

7. 「ルネ・マルレに問う」(1956)

神話的思惟と現代的思惟の対立を強調した際にいつも私は、両者の間に共通性が存することに、つまり両者共に客観化するような思惟であり、したがってある意味で神話的思惟は素朴であっても科学的な思惟と呼ばれうる点に共通性が存在することに、実際どんな疑いをもはさまなかつたのである。(227)

新約聖書の帰省の諸々の物語の実存論的意味は明白にされることができ、現代の人間の人格的生は客観化する思惟の対象ではあり得ない。(227)

D.Glauben und Verstehen 4(著作集 14)

8. 「非神話化の問題によせて」(1963): ④⑤

未来への開放性、将来的であるということ

歴史についての実存論的解釈が歴史的(historisch)な過去の客体的観察を必要とすることは、まったく疑問の余地がない。(171)

歴史科学は、歴史過程を、客体化の視線をとおして一つの完結的な作用連関として理解するのであり、その限りにおいてそれ自体非神話化を行っているのである。(171)

神話の位置づけに関しては、自然科学との間に根本的な違いがある。すなわち、自然科学は神話を排除するが、歴史科学はそれを解釈しなければならない。歴史科学は確かに一つの歴史的現象である神話論的叙述の意味について、問いを提出しなければならない。

(172)

原始科学的な、したがって事物を客体化する思考は、事実すべての神話論に共通のものである。

神話論的思考はしかし、素朴な仕方で彼岸を此岸に対象化する。……非神話化の試みは、これに対して神話の本来的意図を貫徹させようとする。すなわち、人間の本来的現実について神話それ自体に語らせようとするのである。(173)

決定的なことはそうした比喩や象徴が現実的に一つの意味内容を含んでいるということなのであり、それを明らかにすることこそ哲学的、神学的省察の課題なのである。したがって、こうした意味内容がここでまた神話論的言語で表現されることはあり得ない。なぜなら、もしもそうだとすると、またしても解釈されねばならず、それは無限に続けられることになるからである。

神が客観的に確認されるこの世の現象でない以上、神の行為についてはただ、それとの邂逅をとおして生じる我々の実存について語るという仕方でのみ語りうるに過ぎない。神の行為についてのこうした語法を、我々は「類比的」と名付けよう。(174)

この命題は逆説が含まれていることになる。なぜなら、それはこの世の出来事と彼岸における神の行為との逆説的同一性を主張するからである。(175)

この逆説は、歴史的な出来事が、同時に終末論的であるという主張に通じる。(176)

9. 「イエス・キリストと神話論」(1958)

<参考文献>

1. ブルトマン『ブルトマン著作集』新教出版社。
2. 熊澤宣義『増補改訂 ブルトマン』日本基督教団出版局。
3. 笠井恵二『ブルトマン』清水書院。
4. 土屋博『教典となった宗教』北海道大学図書刊行会。
5. ティリッヒ『キリスト教思想史II』(著作集別巻3)白水社。
6. H・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学(上)(下)』新教出版社。
7. J・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。
8. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社。
9. 田辺元「死の存在学か死の弁証法か」(『死の哲学 田辺元哲学選IV』岩波文庫)。

10. 武藤一雄「第四章 終末論の問題」「第一節 現代神学における終末論—特にシュヴァイツァーとブルトマンについて—」（『神学と宗教哲学との間』創文社）、「解釈学的原理としての「中」について—「非神話化」論と関連して—」（『宗教哲学の新しい可能性』創文社）
11. 辻村公一「ブルトマンとハイデッガー」（『ハイデッガー論攷』創文社）